

いつきの“ヒューマン・ビーイング”

人権について考える ⑨

土肥いつき

京都の公立高校教員。24時間一人パレード状態のトランス女性。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

アライであること

2000年代初頭の「同和教育から人権教育へ」という流れの中で、かつては部落差別を中心的に扱っていた人権学習が多様なテーマを扱うことになりました。例えば、わたしの勤務校では「世界人権宣言」「多様性ワークショップ」「障害者」「デートDV」「在日外国人」「沖縄」「アイヌ」「就職差別」「部落」といった内容を扱っています。これらを見てわかるように、「性の多様性」を独立したテーマとしては扱っていません。

実は1997年に半年ほど、ある教員からゲイであることをカミングアウトされたことをきっかけに、性の多様性をテーマにした「風のたより」というニュースレターを個人的につくり、教職員に配布したことがありました。しかしその後、わたしがトランスをはじめた当初のもっともしんどかった時に、「わたしのために」このようなことをしてくれる人は誰もいませんでした。もちろん、「してほしい」と言えば、してくれる人はいただろうとは思いますが、しかし、当時のわたしには、そのひとことを言う勇氣はありませんでした。

その感覚は、その後も続きました。きっといるであろう当事者の生徒のために「性の多様性」を人権学習のテーマとして扱うべきであることはわかっています。しかし、たくさんある人権課題のうちのどれかを選択せざるを得ない時、アライとして生きてきたわたしは、「自分の課題」よりも他の課題を優先してしまいます。だからこそ、「誰かにしてほしい」とも思っていました。ずっとアライとして生きてきたわたしは、きっとわたしのアライがほしかったんだろうと思います。しかしそんな人はあらわれませんでした。いつしかわたしは、「自分のアライはいない」と思うようになりました。そんなわたしに転機がおとずれました。

2015年、ヘイトスピーチ裁判を闘っておられたリンダさんこと李信恵さんを励ます「リンダ祭」というイベントがありました。ヘイトスピーチに対するカウンターをしていたわたしは、アライとして参加しました。実はリンダさんはチマチョゴリのコレクターで、当日、着たい人が着られるように、数着その場にチマ

チョゴリを持ってきておられました。自分がトランスジェンダーであるを知る前のわたしにとって、チマチョゴリは「日本人であること」「男性であること」という、ふたつの決して越えられないハードルの向こうにあるものであり、あこがれと嫉妬が同居する存在でした。その思いは、トランスしてからも続いていました。しかしその日、ふと「着てみようかな」と思ったのです。リンダさんは喜んでチマチョゴリを貸してくださいました。チマチョゴリを着たわたしを、カウンターの人たちは大喜びで迎えてくれました。

翌年、ミナミ・ダイバーシティ・フェスティバルが開催され、わたしはトランスジェンダー生徒交流会として出店を出すことにしました。ある日、リンダさんから「フェスティバルで民族衣装のファッションショーをするからチマチョゴリを着て出ない？」というメールがありました。リンダさんは、ジェンダーバイナリーな民族衣装だからこそ、トランスジェンダーに着てほしいと考えられたようです。当日、チマチョゴリを着て舞台に立ったわたしに、たくさんの人が拍手してくださいました。その瞬間、「ほんとうはたくさんのアライに支えられてきた」ことを直感しました。

長く在日外国人生徒交流会にとりくんできたわたしは、自分がトランスジェンダーと知った時、「自分の後輩たちのための交流会をつくらなくてどうする」と考えました。そして、2006年に「トランスジェンダー生徒交流会（以下、交流会）」を立ち上げました。では、わたしは交流会において当事者なのか。それは違います。交流会における当事者はトランスジェンダー生徒です。わたしはトランスジェンダーである前に、トランスジェンダー生徒に困難を抱えさせている学校の教員です。ですから、わたしは交流会にはアライとしてかかわっています。では、わたしは「支援者」なのか。それも違います。アライには「非当事者」が含意されます。しかしわたしにとってのアライは、ともに闘うという意味においては、すでに当事者です。わたしが考えるアライとは「ともに闘う当事者」です。